

O1-010

IBDと診断された思春期の子どもへ向けた 復学時支援プログラムの作成と実施・検討

高野 祥子¹、堤 信¹、高津 典孝¹、
甲斐 さゆり¹、丸山 大地¹、大畑 千賀¹、
井上 貴仁¹、久部 高司¹、平井 郁仁²、小川 厚¹

¹福岡大学筑紫病院、

²福岡大学

【背景】

炎症性腸疾患（以下 IBD）患者数は増加傾向にあり好発年齢は 10～30 代で、思春期に発症することが少なくない。2019 年から多職種と協働し、思春期の発達段階の特性に合わせた支援プログラムの知見を積み上げることを目的として活動してきた。2019 年の調査で思春期 IBD 患者は「同世代同疾患患者と出会う機会が少ない」事、又「周囲の理解者の存在が QOL を上げる」、一方で「理解者を得ることは簡単ではない」と感じているという知見を得た。本研究は思春期 IBD 患者の QOL 向上を目指し、支援プログラムの知見を積み上げることを目的とする。

【方法】

同意を得られた思春期 IBD 患者を対象にアンケート調査を実施する。さらに医療・教育・デザイン分野の 9 職種と協働し、患者参加型のワークショップ（以下 WS）を行う。オンラインでの実施とし、成果物として冊子「学校生活をよりよいものにするために IBD と診断されたあなたへ」（以下、冊子）を作成する。尚、本検討は所属機関の倫理審査委員会の承認を得ている。

【結果】

事前・当日アンケートには各 8 名回答を得た。回答者は 13～18 歳で平均 15.5 歳だった。事前アンケートでは「診断後復学にあたり学校生活に変化があった／とてもあった」と 8 名中 6 名が回答し、その 6 名の内 5 名が「その変化はとても／少し大変なものであった」と回答した。WS にはアンケート回答者 8 名を含む 9 名が参加した。架空人物「IBD と診断されたばかりの A さん（中学 1 年）」に向けて体験に基づくアドバイスを行う設定で、患者と各専門職とが双方向にて議論する形で進行的な。また、症状や体験を他者へ伝える視点にてデザイナーを中心に意見交換を行ない冊子の骨子を作成した。WS に対しては「参加してよかった」「また参加したい」との感想が得られ、「自分だけじゃないと実感した」との声が複数あった。完成した冊子について通学中の教諭から賞賛されるなどポジティブなエピソードも報告された。

【考察】

思春期 IBD 患者は、復学時に生活変容した患者が多く、個別の課題に対する支援の重要性が示唆された。他者へ伝える視点での WS は概ね好評であり、完成した冊子を基に思春期 IBD 患者への啓蒙が期待できる。オンラインでの WS 実施には課題もあるが、参加しやすい環境を提供する一助となったと考えられた。